あるとする見解ー当日の質疑・応答の中にもこうした見解に近いものがあったように思えたーは、これまでの歴史資料保存運動あるいは歴史学運動の課題や、今回の史料ネットの活動から得られた教訓を、結果として軽視ないしは無視することにつながりかねない。重要なことは、歴史学者がその固有の専門的役割と住民との歴史資料の「共有」という二つの課題の間に張りつめる緊張関係を絶えず自覚し、かつその緊張関係に進んで身を委ねる強い責任意識を持つことではないだろうか。固有の専門的役割を担う立場を堅持しつつ、同時に住民との歴史資料の「共有」という困難な課題に取り組もうとされたところに、今回の史料ネットの活動の最大の教訓があるのではないかと個人的には感じた。

ともあれ、阪神・淡路大震災の発生から二年の月日が経過した今、史料ネットが今後どのような活動を続けられるのかに、歴史研究者からのみならず多くの人々の関心が寄せられることと思う。

－ ¢ － ¢ － ¢ － ¢ － ¢ － ¢ － ¢ － ¢ －

史料ネットの活動から今後の歴史学・史料保存運動を考える

保立道久　（東大史料編纂所）

私は、ちょうど大震災の時、歴史学研究会の事務局を担当していた。地震の直後に学会や神戸大学の人々と連絡をとり、連絡会に参加し、できる措置はしたつもりではあったが、しかし、大会前、歴研の会務に様々な問題があって、週に４、５日は事務所に詰めているという状態で、結局、神戸を訪れ、まだ生々しく残っていた惨状をみたのは、９月、神戸大学への集中講義の時になってしまった。宿舎で、夜、友人の死去の連絡をうけたこともあって、やはり直接に史料救援活動に参加するべきであったという思いとともに、この時の神戸の印象は忘れがたい。以下は、その時の市民講座で「福原京とその時代」という報告をして以来、宿題にしたままの問題である。

報告の前日、私は兵庫駅から南に歩いて大輪田泊の故地を訪ね、そこが一種の寺町の様相をもっており、そしてどの寺社も震災の被害をうけているのをみた。一遍の墓所である真光寺や、大輪田泊築港時からの寺院である能福寺、そして神戸駅のすぐ南のえびす神社などは報告の準備との関係でも興味深いものであったが、特に意外で興味深かったのは南端の清盛塚と琵琶塚であった。というのは、集中講義の間に、神戸大学の奥村氏から森田修一氏の論文「庄山『平盛俊墓』を興す」（『研究紀要、百耕』創刊号、１９９２年）を教えられ、戦前の神戸市民が平家や清盛に愛着心をもっていることを知ったからである。清盛塚は、その神戸市民の意識の物証であるということになる。

森田氏は神戸市民が平家一門に対して抱いている深い愛着を論じておられるが、私も、そのような歴史文化をどう受けつぐかは重要な問題であると思う。もちろん、神戸の人々の平家びいきは一種の地方顕彰意識であろうから、現代歴史学が、それをそのままうけつぐ訳にはいかず、手続きとしては、第一に源平の物語を中世の政治史・社会史の中に位置づけ直すことが必要だろう。市民講座の宣伝をしたところ、地元の新聞記者が「福原京」の存在をしらず、「神戸に都があったのですか」という反応であったそうだが、平家の物語は知っていても、それを平安時代末期の政治史との関係で了解している訳ではないのが一般である。

そして、第二は神戸市民の平家びいきや、それを示す森田氏が取り上げた庄山の盛俊塚のような遺跡・遺物を考えるためには、中世史と近世史・近代史の共同が必要なのではないかということである。平家びいきという感情や物語は、地域の歴史的な文化であって、歴史学とイコールではないし、歴史学はみずから物語を語ろうと考えてはならない学問であるとは、私も思う。しかし、「神戸における平家びいきの生成と展開について」というようなテーマで歴史具体的な検討を行うことは、歴史学の一つの仕事である。現代の学会の中では、専門分化がきびしく、中世史研究と近世史・近代史研究の共同というようなことはなかなか具体的に考えられることではないが、しかし、このような問題は、たとえば地域史研究にとっても重大な論点であるのではないだろうか。

もちろん、このようなことは通常時では小さな問題である。しかし、10年ほど前、二つの遺跡保存運動に関わった時の経験からすると、運動にとっては異なる時代の研究者の協力が決定